

感謝感情と負債感情の共起が第三者への 向社会的行動に及ぼす影響

筑波大学大学院人間総合科学研究科 吉野 優香

筑波大学人間系 相川 充

The effects of both emotional gratitude and indebtedness on prosocial behavior towards outsiders

Yuka Yoshino (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Atsushi Aikawa (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this experimental study, we seek to elucidate the effects of both emotional gratitude and emotional indebtedness on prosocial behavior towards outsiders. The participants (N = 54) were randomly assigned to one of three conditions: a gratitude condition, where participants were induced to experience considerable emotional gratitude and minimal emotional indebtedness; an indebtedness condition, where participants were induced to experience both considerable emotional gratitude and emotional indebtedness; and a neutral condition, where participants were not induced to experience either emotional gratitude or indebtedness. All participants were then requested by a confederate to complete a questionnaire as indicator of prosocial behavior. The results revealed no significant differences between and no interactions among the three conditions. These findings highlight the need to reconsider both the validity of any manipulations of emotional gratitude and indebtedness and how to measure prosocial behavior towards outsiders.

Key words: emotional gratitude, emotional indebtedness, prosocial behavior

被援助経験には、感謝感情だけでなく、負債感情が伴うことが報告されている（一言・新谷・松見，2008；吉野・相川，2017）。感謝感情は、「他者のおかげで望ましい状況の獲得もしくは悪い状況の回避がなされた」と認知することで生じる肯定的な感情」と定義され、負債感情は「他者のおかげで望ましい状況の獲得もしくは悪い状況の回避がなされた」と認知することで生じる返済の義務に関わる感情」と定義されている（吉野・相川，2017）。我々は、日々の生活の中で他者からもたらされた利益によって、「ありがたさ」と「すまなさ」を同時に感じている

のである。

従来の感謝研究では、主として感謝（gratitude）が向社会的行動¹⁾に及ぼす影響の検討が進められてきた（Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno, Bartlett, Baumann, Williams, & Dickens, 2010）。例えば、実験協力者からの援助により感謝感情を喚起された実

1) 本研究における向社会的行動は、心理学辞典「他者に利益をもたらす行動全般をさす」やAPA心理学大辞典「自分以外の人や集団にとって有益となる社会的で建設的な行動、あるいはそのような方法」に基づき、交換関係にある他者および、第三者への援助行動や支援など、他者の利益になる行為全般を指す概念として用いている。

験参加者は、感謝感情を喚起されなかった実験参加者に比べ、援助行動をとる程度 (Bartlett & DeSteno, 2006) や、実験参加者自身にコストのかかる対人的な経済行動をとる程度 (DeSteno et al., 2010) が多いことが示されている。また、これらの実験結果では、感謝感情が促進した向社会的行動は、実験場面において交換関係にある実験協力者に対してのみ生じるものではなく、交換関係外の第三者に対しても生じていた。これらの知見から、感謝感情は、互恵的利他主義 (Trivers, 1971) に基づく直接互恵性だけでなく、間接互恵の原理 (Nowak & Sigmund, 1998) に基づく間接互恵性をも促進すると指摘されている。

感謝研究における感謝感情が及ぼす向社会的行動への影響に関する知見は、感謝感情の機能を明らかにしてきたが、感謝感情と負債感情が互いに独立しているという前提に基づく研究が多い (Tsang, 2006; Watkins, Scheer, Ovnicek, & Kolts, 2006; 吉野・相川, 2017)。つまり、先行研究において検討されている感謝感情の影響は、負債感情の影響を考慮していない知見であるといえる。感謝感情と負債感情が共起していることを指摘する知見 (一言他, 2008; 蔵永・樋口, 2011a, 2011b; 吉野・相川, 2017) や、実生活の感謝場面において日本人は「すみません」という感謝表現を用いることから、感謝研究における負債感情の影響は無視できない。

負債感情は、衡平理論に基づくコストと価値の不平衡状態の解消を動機づけたり、互恵規範に基づく返報義務感を喚起したりすることにより返報行動を促すと考えられてきた (Greenberg & Frisch, 1972; 一言他, 2008; 松浦, 1992, 2007; Walster, Walster, & Berscheid, 1978)。そのため、従来の研究では、負債感情は、利益供与者に対する返報行動を促すが、第三者への向社会的行動を促進しないという知見が示されてきた (Tsang, 2006; Watkins et al., 2006)。しかし、従来の感謝研究における負債感情が間接互恵性に及ぼす影響 (Tsang, 2006; Watkins et al., 2006) は、感謝感情と負債感情が共起することを前提に検討した知見ではない。

感謝感情と負債感情が共起している状況において、負債感情が間接互恵性に及ぼす影響を検討した研究として、「被災地のリレー (渥美, 2012, 2014)」が指摘できる。「被災地のリレー」とは、「かつて災害に遭った時に支援を受けた元被災者が新たな災害に遭った被災者を支援することを表現したものであり、その仕組みは、被災で助けられたことが負債となり、それを別の被災地に返すことで安堵感が得られるため被災地のリレーが生じる」と説明が

されている (渥美, 2012, 2014; 三谷, 2015)。

感謝研究の観点から「被災地のリレー」を解釈するならば、被災者は、感謝感情だけでなく負債感情を感じたことにより、支援者に対する直接的な返報ではなく、被災した他の被災者に対する間接的な返報を行うと考えられる。したがって、「被災地のリレー」は、感謝感情と共に経験される負債感情は、直接的な交換関係にある利益供与者に対してのみ向社会的行動をとらせるのではなく、交換関係にない第三者に対しても向社会的行動をとらせることを予想させる。

感謝感情と負債感情の実験的手法による喚起

感謝感情と負債感情が共起しているという前提のもとで、両感情を実験的に操作した研究は、前例がない。感謝感情と負債感情の経験は、両感情の間に正の相関関係がある (一言他, 2008; 吉野・相川, 2017) と示されているが、他方で、感謝表現である「ありがとう」と「すみません」の表出は、状況や援助内容により使い分けられている (熊取谷, 1991)。これらの知見は、ある被援助場面において、両感情が共に経験されつつも、一方の感情が優勢な場合があると考えられる。すなわち、被援助場面において、「ありがたさ」も「すまなさ」もともに経験するが、「ありがたさ」が強い場合と「すまなさ」が強い場合があると考えられる。そこで、本研究では、感謝感情と負債感情が共起しているが、感謝感情が強く喚起される「感謝感情喚起条件」と、負債感情が強く喚起される「負債感情喚起条件」の2条件を実験条件として設定する。実験条件における影響を比較検討するため、感謝感情も負債感情も経験しない「統制条件」も加えて設定する。

感謝感情と負債感情を共に操作する感情操作手法を用いた研究は前例がないため、感謝感情の操作手法を応用する。感謝感情喚起手法には、様々な手法が存在するが、有名な手法の1つは Bartlett & DeSteno (2006) が用いた「被援助場面を実験的に作る手法」である。これは、実際に被援助場面を実験室内に作り出すことにより、実験参加者の感謝感情を喚起させる手法である。

「過去の感謝経験をもとに感謝感情を喚起させる手法」も有名な手法である。具体的には、感謝を数える・リストアップすること (Emmons & McCullough, 2003) や、感謝を思い出すこと (DeSteno, Li, Dickens, & Lerner, 2014; Watkins, Woodward, Stone, & Kolts, 2003)、感謝の手紙を書くこと (Seligman, Steen, Park, & Peterson, 2005)

などである。実験参加者が実際に経験した感謝場面を想起させることによって、実験参加者の感謝感情を喚起させる手法である。

これらの手法は、それぞれに長所と短所がある。「被援助場面を実験的に作る手法」の長所は、実験参加者が経験する被援助内容や利益供与者を明確にすることができ、どの実験参加者に対しても同一にできることである。例えば Bartlett & DeSteno (2006) の感謝条件では、実験協力者がコンピューターの不具合を修正する援助を、実験参加者に提供した。したがって、感謝条件のどの実験参加者にとっても利益供与者は、実験協力者であり、被援助内容は、コンピューターの不具合の修正である。

感謝条件のすべての実験参加者に統一した被援助内容を与えることは、短所も生み出す。感謝感情は、被援助内容に対する受益者の主観的評価である「利益の評価」の程度に規定される (Wood, Maltby, Stewart, Linley, & Joseph, 2008; 吉野・相川, 2017) ため、同一の被援助内容であっても、受益者である実験参加者の主観的評価によって感謝感情の程度に違いが生じてしまう。

他方で、「過去の感謝経験をもとに感謝感情を喚起させる手法」の長所は、個々の実験参加者が、実験参加者自身にとって強く経験した感謝感情を、実験に用いることができる点である。例えば、DeSteno et al. (2014) は、感謝条件の実験参加者に対し、「ありがたかった出来事を思い出し、そのことについて5分間、紙に書き出して下さい」と指示をし、感謝感情を喚起させた。Watkins et al. (2003) は、「感謝した人について詳細に思い出す」という手続きを用いた。この研究では、「感謝したことを書き出す」よりも、「感謝を思い出す」方が、感謝感情の大きな効果を得られると指摘している。

「過去の感謝経験をもとに感謝感情を喚起させる手法」は、実験参加者が想起するありがたかった出来事は、実験参加者ごとに異なる内容となるが、実験参加者全員が感謝を経験した出来事を想起している。したがって、この手法は、いずれの実験参加者においても、感謝の感情の程度を左右する実験参加者の主観的評価が高い、感謝感情を実験に用いることができる。

実験参加者ごとに想起する被援助内容が異なることは、実験の統制において短所であると指摘することもできる。しかし、感謝感情を強く喚起させるという観点においては、実験参加者が主観的に感謝感情を強く経験した被援助内容を実験に用いるべきであろう。

そこで本研究では、感謝感情と負債感情を喚起さ

せる手法として、過去の感謝経験をもとに感謝感情を喚起させる手法を選択する。実験参加者に想起を求める場面は、感謝感情喚起条件では「ありがたさを感じた被援助内容」とし、負債感情喚起条件では「申し訳なさ・すまなさを感じた被援助内容」とする。なお、感謝感情と負債感情の生起は、利益供与者との関係によって異なることが分かっている (吉野・相川, 2017) ため、利益供与者は「友人」に統制し、友人からの被援助場面を思い出すように指示を行う。統制条件の実験参加者には、感謝感情も負債感情も喚起させないために、「友人との会話場面」について、想起を求める。

さらに、感情喚起の実験操作の効果を強めるために、ポジティブ心理学的介入において開発された「味わうこと (savoring)」(Bryant & Veroff, 2007) を操作に組み込むこととする。「味わうこと」とは、経験した出来事を多角的に捉えることであり、気づきをもたらすものである (Kabat-Zinn, 2009)。特定の出来事を思い出すときに、その出来事を「味わう」よう意識することは、ポジティブ感情が個人にもたらす良い効果を増幅する。そこで、実験操作の効果を強めるために、出来事を思い出すときに、「出来事を味わうように思い出す」という言葉を指示に付加することとする。

向社会的行動の測定手法

先行研究で用いられている第三者への向社会的行動の測定法は、実験参加者に対し、第三者が協力の依頼を直接行うか、実験者が第三者への協力行動が可能であることを伝えるかである (Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010)。Bartlett & DeSteno (2006) は、実験終了後に、それまでの実験とは全く係わりのない第三者 (実験参加者) から実験参加者に対して、調査協力の依頼を行い、実験参加者がその調査用紙に回答する時間の長さを向社会的行動の指標とした。

この測定方法には、2点問題がある。第1に、実験参加募集をする際に実験参加者に対して提示する拘束時間と実際の拘束時間が異なる点で倫理的問題がある。第2に、実験の後に予定がある実験参加者と、予定がない実験参加者との違いが、実験結果に影響を及ぼす危険性がある。

そこで、本研究における第三者への向社会的行動の測定では、次の改善を行う。まず、第三者 (実験協力者) から実験参加者へ他の調査協力の依頼は行うが、その場での調査は実施しない。調査協力の依頼では、調査は、実験参加者が時間に余裕のある後

日に回答をすると説明し、調査に対する回答可能時間の選択を求める。

本研究の概観

本研究は、感謝感情と負債感情が共起するという前提のもと、両感情を共に扱い、両感情が向社会的行動に及ぼす影響の検討を行う。本研究の目的は、1点目に、先行研究で指摘される感謝感情が第三者への向社会的行動に及ぼす促進効果が本邦においても同様にみられるか否かを確認することである。2点目は、感謝感情と負債感情の共起を考慮した際に、負債感情が第三者への向社会的行動に及ぼす影響を明らかにすることである。

1点目の目的に関して予想される結果は、感謝感情が負債感情よりも強く喚起される感謝感情喚起条件は、統制条件よりも第三者への向社会的行動の程度が多くみられる、と考える。感謝感情と負債感情が共に生起していることが前提であっても、感謝感情が及ぼす間接互惠性への影響は、先行研究(Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010)と同様の結果が得られるであろう。

2点目の目的に関して予想される結果は、負債感情が感謝感情よりも強く喚起される負債感情喚起条件は、統制条件よりも、第三者への向社会的行動の程度が多くみられる、と考える。被災地のリレーがインタビューで確認ができるように(渥美, 2012, 2014)、感謝感情と負債感情が共に生起することが前提にある場合、負債感情は、間接互惠性を促す効果を持つであろう。

方 法

実験参加者

実験参加者54名(男性27名・女性27名)に対し、実験室実験を行った。平均年齢は20.20(±1.34)歳であった。実験期間は、2015年10月後半から11月中旬までであった。実験参加に対する報酬は、200円相当の文房具であった。

実験参加者は、「感謝感情喚起条件」、「負債感情喚起条件」、「統制条件」の3条件に無作為に割り当てられた。第三者への向社会的行動の測定に関するディセプションに気がついたり、実験協力者と面識があったりした実験参加者を除き、49名(感謝感情条件:15名(男性7名・女性8名)、負債感情条件:17名(男性8名・女性9名)、統制条件:17名(男性10名・女性7名))を分析対象とした。

なお、実験は、筑波大学の研究倫理委員会の承認

を得て、倫理的な配慮を行ったうえで実施された。

実験協力者

第三者への向社会的行動の測定に関わる、本実験とは無関係な研究の調査協力を依頼する実験協力者は、男性の場合と女性の場合を設定した。男性実験協力者は3名、女性実験協力者は2名であった。実験協力者と実験参加者の性別の組み合わせは調整せず、実験協力者が男性の場合と女性の場合で、それぞれ約半数の実験参加者に対応した(男性実験協力者は28名に対応し、女性実験協力者は26名に対応した)。

各変数の測定

感謝感情と負債感情の測定 感謝感情と負債感情の喚起状態を確認するために、次の質問項目への回答を求めた。質問項目に関する教示は、質問に回答している「現在の」感情状態を回答するように求めた。感謝感情は「好ましい」、「ありがたい」、「感謝」、「寛大な」の4項目、負債感情は「負い目」、「申し訳ない」、「悪い」、「すまない」の4項目、計8項目(吉野・相川, 2017)で尋ねた。これらの質問項目は、「0:まったく感じない」から、「10:非常に強く感じる」までの11件法で回答を求めた。

第三者への向社会的行動の測定 第三者への向社会的行動は、本実験とは異なる研究の調査にどの程度参加の意思を表明するかによって測定した。本実験とは異なる研究の調査参加依頼は、カバーストーリーであり、実際には実施されない調査の依頼であった。

本実験とは異なる研究の調査内容は、「SNSの使用」に関する、所要時間が90分のインターネット上で行うアンケートであると説明された。調査内容の説明の後、実験参加者は、参加の可否を選択し、参加できる場合には、所要時間90分のうち、何分間回答をするか5分間隔で選択した。これに加えて、実験参加者は、アンケート回答用のURLを後日送付するためであると説明をうけ、URLを受け取るための連絡先を記入した。調査に参加できる場合における、最小の調査回答時間は5分間で、最大の調査回答時間は90分間であった。依頼用紙には、実験参加者が実験協力者に対して向社会的な態度を示しやすくなるように、「所要時間が長いものを選んで回答してくださると一番助かる」という旨を記した。

特性感謝と特性負債感 特性感謝と特性負債感とは、感謝感情と負債感情の経験しやすさに関する個人特性である。これらの個人特性は、向社会的行動の行いやすさに、個人差として影響を与えている可

能性が考えられたため、共変量として用いるために測定した。

特性感謝は、「対人的感謝尺度（藤原・村上・西村・濱口・櫻井，2014）」で測定した。対人的感謝尺度は、8項目からなる対人的な特性感謝を測定する尺度である。回答は、「1：まったくあてはまらない」から「7：非常によくあてはまる」の7件法とした。

特性負債感は、「心理的負債尺度（相川・吉森，1995）」を使用し測定した。回答は、「1：まったくあてはまらない」から「6：非常によくあてはまる」の6件法で回答を求めた。

なお、心理的負債尺度は、18項目からなる尺度であるが、質問項目のうち、以下の2項目は心理的負債の直接的な内容から外れるという理由と、特性感謝の内容に近い項目であることから、分析の際には用いなかった。削除した項目は、「誰かが私の命を救ってくれるようなことがあれば、私は一生その人に恩を感じるだろう」と、「ちょっとした行為にも、ありがたいという感謝の気持ちは必要だと思う」であった。

手続き

実験参加者は、「友人関係の想起が個人に及ぼす影響の検討」を目的とした実験に参加した。

初めに、実験の目的と実験の流れの説明を行った。実験の目的に関する説明には、カバーストーリーを用い、友人と過ごす日常が、個人に及ぼす影響を調べることであったとした。実験手順に関してもカバーストーリーに則り、「友だちと過ごす日常の一場面を思い出す」と「いくつかの質問に答える」ことの、大きくは2点のことをすると、説明した。一連の説明後、実験参加者から実験参加の同意を得たのち、実験を開始した。

本当の実験手続きは、「条件ごとの感情喚起の操作・感情状態の確認」、「第三者への向社会的行動の測定」、「個人特性の測定」の3点から構成されていた。条件間の手続きの違いは、条件ごとの感情喚起の操作と操作確認であり、その他の手続きは条件間で共通であった。

条件ごとの感情喚起の操作と感情状態の確認

いずれの条件も、感情喚起の操作手順は共通していた。「いくつかの場面の想起」を行い、「特定の場面を詳細に思い出す」ことにより感情を喚起させた後、「操作確認」により感情状態を確認した。

感謝感情喚起条件 感謝感情喚起条件に割り当てられた実験参加者へは、初めに、「友だちと過ごす

日常の一場面を思い出す」と称して、「ここ1年間にあった、友だちに手助けしてもらって『うれしいな』、『ありがたいな』と感じた場面を思い出していただきます。まず、少し時間をとりますので、この1年間を思い返して友だちに手助けされて『うれしいな』、『ありがたいな』と思った場面を思い出してください」と教示をし、2分間、様々な場面の想起を求めた。

次に、思い浮かべた場面の内、一番「うれしい」、「ありがたい」と感じた場面を、簡単に紙に書くことを求めた。この手続きは、この後に詳細に思い出す場面が、実験者が教示した内容と異なっていないか確認するためのものであった。

最後に、記述した一番「うれしい」、「ありがたい」と感じた場面を、その時感じた感情を中心に詳細に思い出すことを求めた。教示は、「手助けしてもらって『うれしいな』、『ありがたいな』という気持ちを思い出す時には、友だちとのやりとりの場面を思い出すだけでなく、その場で『うれしいな』、『ありがたいな』と感じたあなたの気持を味わいながら、その場面を追体験するようにしてみてください」とし、3分間、詳細に思い出す時間をとった。

3分間、詳細に思い出すことを終えた後、操作確認のため、感謝感情と負債感情の質問項目に回答を求めた。

負債感情喚起条件 負債感情喚起条件に割り当てられた実験参加者への感情の操作は、感謝感情の操作とはほぼ同じものであったが、「友人から手助けされた場面で感じた感情」という点において異なる教示を行った。

感謝感情喚起条件との相違点は、思い出す場面の感情状態であった。感情操作の手続き全体を通して、感謝感情喚起条件で「うれしいな」、「ありがたいな」とした部分を、負債感情喚起条件では、「悪いな」、「申し訳ないな」と変更した。

統制条件 統制条件に割り当てられた実験参加者へは、初めに、ここ1年間にあった友だちと会話した場面を思い出すことを求めた。教示は、「ここ1年間にあった、友だちと会話した場面を思い出していただきます。まず、少し時間をとりますので、この1年間くらいを思い返して、友だちと話した場面を思い出してください」とした。思い出す時間は、2分間であった。

次に、思い出した場面の内、一番最近、友だちと話したその内容を、簡単に紙に書くことを求めた。最後に、記述した一番最近の会話の内容を、詳細に思い出すことを求めた。教示は、「会話の内容を思い出す時には、友だちとのやりとりといった場面

思い出すだけでなく、友だちと会話をしているあなた自身を鮮明に思い出し、その場面を追体験するようにしてみてください」とし、3分間、詳細に思い出す時間をとった。

3分間、詳細に思い出すことを終えた後、操作確認のため、感謝感情と負債感情の質問項目に回答を求めた。

第三者への向社会的行動の測定

感情喚起の操作と感情状態の確認を終えた後、実験者は報酬を取りに行くと言って、実験参加者を実験室に残し退室した。実験者が出ていった後、しばらくして実験協力者1名が実験室に入室した。

入室の際に、実験協力者は、心理学を専攻する大学院生であり実験協力者自身の研究において調査を実施しているが、調査への参加者数が足りず困っていることと、実験参加者に調査参加の依頼をしたいということを、実験参加者に対して伝えた。このとき実験参加者へは、この調査参加の依頼が、実験参加者が今行っている実験とは異なる研究であることも伝えられた。

実験協力者は、調査参加依頼の用紙を実験参加者に渡し、実験参加者の回答を待った。実験協力者は、実験参加者が記入を終えた調査参加依頼の用紙を回収し、実験室を退室した。

個人特性の測定

実験協力者が調査依頼の用紙を回収し退室した後、実験者は、個人特性の尺度への回答を実験参加者へ求めた。実験参加者が個人特性への回答を終え、実験手続きは終了した。

実験手続き終了後、実験の本来の目的と、実験協力者が、調査参加依頼をしたことに関して、デブリーフィングを行った。デブリーフィングの際には、実験参加者に、実験協力者との面識の有無と、ディセプションに気がついていただどうかを尋ね

た。

最後に、実験参加者へ、本来の説明を受けたうえでの同意書にサインを求め、報酬を渡し、実験は終了した。

結果

事前分析

初めに各変数の得点を算出した。「特性感謝 ($\alpha = .94$)」の変数と「特性負債感 ($\alpha = .83$)」の変数は、尺度の項目の平均値を得点とした。「感謝感情 ($\alpha = .53$)」の変数は、「好ましい」、「ありがたい」、「感謝」、「寛大な」の4項目の値の平均値を得点とし、「負債感情 ($\alpha = .96$)」の変数は、「負い目」、「申し訳ない」、「悪い」、「すまない」の4項目の値の平均値を得点とした。「利益の評価」の得点は、3項目の値の平均値とした。「第三者への向社会的行動」の変数は、5分から90分までを5分間隔で、1から18の値に置き換え、不参加と答えたものを、0に置き換え、0から18までの値の幅をとる変数とした。

用いた変数の平均値は、Table 1に表した通りである。

感情喚起の操作確認

感謝を思い出す感情喚起手法が感謝感情と負債感情の操作として有効であったかを確認するため、「条件」(感謝感情喚起・負債感情喚起・統制)×「実験参加者の性別」(男性・女性)の2要因分散分析を、従属変数である感謝感情と負債感情ごとに行った。実験参加者の性別を独立変数に加えた理由は、感謝感情の操作には、男女差があることが報告されている(Kashdan, Mishra, Breen, & Froh, 2009)ためであった。

「感謝感情」を従属変数した場合 分散分析の結果、「条件」において有意な主効果がみられ ($F(2, 47) = 10.52, p < .001, \eta_p^2 = .33$)、「実験参加者の

Table 1
使用した変数の平均値と標準偏差

	感謝感情喚起条件		負債感情喚起条件		統制条件	
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)
特性感謝	5.60	(0.59)	5.65	(1.23)	5.80	(0.80)
特性負債感	4.14	(0.34)	3.91	(0.59)	4.20	(0.67)
感謝感情	8.63	(1.17)	8.00	(1.05)	6.71	(1.59)
負債感情	4.22	(2.79)	6.78	(2.70)	1.65	(1.77)
第三者への 向社会的行動	9.93	(6.47)	8.06	(6.50)	8.94	(5.89)

性別)においても有意な主効果がみられた ($F(1, 47) = 4.47, p = .04, \eta_p^2 = .09$)。しかし、「条件」と「実験参加者の性別」には、有意な交互作用はみられなかった ($F(2, 47) = .15, ns, \eta_p^2 = .01$)。

「条件」の主効果を検討したところ、「感謝感情」は、「感謝感情喚起条件」($M = 8.67, SE = .33$)の方が、「統制条件」($M = 6.63, SE = .31$)よりも、有意に大きな値を示し ($p < .001, 95\%CI [.90, 3.16]$)、「負債感情喚起条件」($M = 8.02, SE = .31$)の方が、「統制条件」よりも、有意に大きな値であった ($p < .001, 95\%CI [.28, 2.48]$)。「感謝感情喚起条件」と「負債感情喚起条件」の間には有意な差がみられなかった ($ns, 95\%CI [-.47, 1.78]$)。

「実験参加者の性別」の主効果を検討したところ、「感謝感情」は、「女性」($M = 8.16, SE = .26$)の方が、「男性」($M = 7.39, SE = .26$)よりも、有意に大きな値を示した ($p = .04, 95\%CI [.04, 1.52]$)。

「負債感情」を従属変数とした場合 分散分析の結果、「条件」において主効果がみられ ($F(2, 47) = 18.13, p < .001, \eta_p^2 = .46$)、「実験参加者の性別」の主効果はみられなかった ($F(1, 47) = .90, ns, \eta_p^2 = .02$)。「条件」と「実験参加者の性別」の交互作用はみられなかった ($F(2, 47) = .41, ns, \eta_p^2 = .02$)。

「条件」における主効果を検討したところ、「負債感情」は、「負債感情喚起条件」($M = 6.78, SE = .60$)の方が、「感謝感情喚起条件」($M = 4.26, SE = .64$)よりも、有意に大きな値を示した ($p = .02, 95\%CI [.31, 4.71]$)。そして、「負債感情喚起条件」は、「統制条件」($M = 1.60, SE = .61$)よりも、有意に大きな負債感情の値を示した ($p < .001, 95\%CI [3.04, 7.32]$)。また、「感謝感情喚起条件」は、「統制条件」よりも、有意に大きな負債感情の値を示した ($p = .01, 95\%CI [.46, 4.88]$)。

以上をまとめると、感謝感情は、統制条件よりも、感謝感情喚起条件と負債感情喚起条件が同程度に強く喚起されていた。負債感情は、負債感情喚起条件、感謝感情喚起条件、統制条件の順に強く喚起されていた。本研究での感謝感情喚起条件と負債感情喚起条件は、どちらも感謝感情が強く喚起されているが、感謝感情喚起条件は負債感情の喚起が小さい条件であり、負債感情喚起条件は、負債感情の喚起が大きい条件であった。

感謝感情と負債感情が第三者への向社会的行動に及ぼす影響

第三者への向社会的行動は、個人特性である、「特性感謝」と「特性負債感」の影響を受ける可能性が

考えられるため、「特性感謝」と「特性負債感」を分散分析の際に共変量として投入すべきか判断する必要があった。そこで、「特性感謝」および「特性負債感」と、「第三者への向社会的行動」との間の相関係数を算出した。その結果、どちらの個人特性も、第三者への向社会的行動の間の相関係数はいずれも有意ではなかった (特性感謝: $r = .25$, 特性負債感: $r = -.05$)。そこで「特性感謝」と「特性負債感」は、共変量として分散分析を行う際に投入する必要はないと判断した。

第三者への向社会的行動に関して、「条件」(感謝感情喚起・負債感情喚起・統制) × 「実験参加者の性別」(男性・女性)の2要因分散分析を行った (Figure 1)。「条件」の有意な主効果はみられず ($F(2, 47) = .35, ns, \eta_p^2 = .02$)、「性別」の主効果も有意ではなかった ($F(1, 47) = 3.74, ns, \eta_p^2 = .08$)。「条件」と「性別」の有意な交互作用もみられなかった ($F(1, 47) = .98, ns, \eta_p^2 = .04$)。

考 察

本研究では、感謝感情と負債感情の喚起が第三者への向社会的行動に及ぼす影響を検討することを目的とした。この目的を達成するために、「感謝を思い出す」と「感情を味わう」ことを併用した操作により、感謝感情と負債感情の喚起を条件間で操作し、第三者への向社会的行動の生起の差を検討した。

感謝感情と負債感情の喚起手法に関する考察

感謝感情と負債感情は共起するという前提に立ち、本研究では両感情を操作するために、「感謝を思い出す」(Watkins et al., 2003) ことと「味わうこと (savoring)」(Bryant & Veroff, 2007) を併用した感情喚起手法を実施した。その結果、感謝感情喚起条件は、感謝感情が強く喚起され、負債感情が弱く喚起された条件となり、負債感情喚起条件は、感謝感情も負債感情も共に強く喚起された条件となった。

本研究における感謝感情と負債感情の喚起状態から、被援助場面における感謝感情と負債感情の経験に関して、示唆を得ることができた。感謝感情喚起条件の感情喚起状態は、感謝感情が強く喚起され、負債感情が弱く喚起された。これは、両感情が共起するという前提を再現していたといえる。なおかつ、「ありがたい、うれしい手助け」の場面では、感謝感情が優位に経験されるという、感情状態に関する示唆を得た。他方、負債感情喚起条件の感情喚

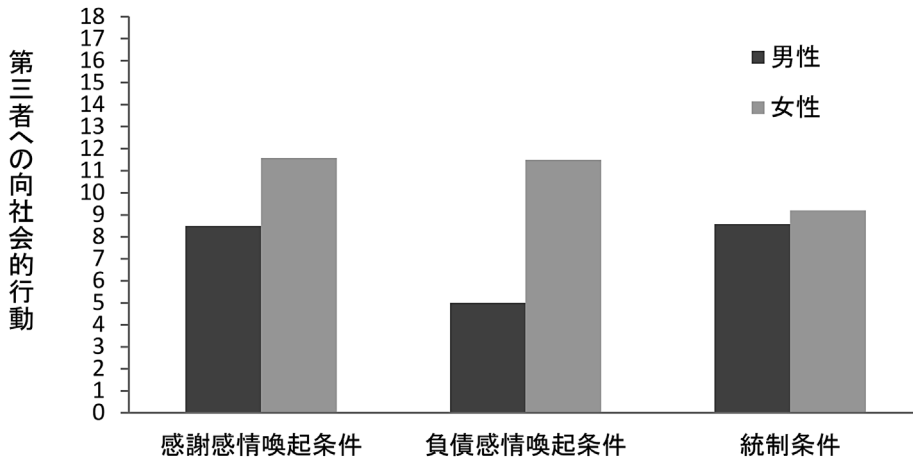


Figure 1. 「第三者への向社会的行動」を従属変数とした「条件」と「性別」の二要因分散分析。

起状態は、感謝感情も負債感情もともに強く喚起された。これは、感謝感情喚起条件と同様に、両感情が共起するという前提を再現しているといえよう。

また、感謝感情と負債感情が共に強く喚起された結果は、想起した場面自体は、「申し訳ない、すまない手助け」であるとラベリングされているが、実際の経験や場面の想起によって喚起された感情は、感謝感情も負債感情も共に強いものであったことを意味する。このことから、「申し訳ない、すまない手助け」では、感謝感情と負債感情を同じように強く経験していても負債感情が優先されて認識されるという、感情状態が示唆される。

この感情状態は、負債感情には、申し訳ないや、負い目などのように、ネガティブ感情の側面もあることと、ネガティブ感情の特徴から説明が可能であろう。ネガティブ感情は、生死にかかわる状況から脱却する行動を起こすと指摘 (Tooby & Cosmides, 1990) されるように、影響の大きい感情である。ゆえに、両感情を同程度強く経験していたとしても、感謝感情の経験ではなく、負債感情の経験として認識されるという状況が生じるのであろう。

感謝感情喚起条件と負債感情喚起条件における感情喚起状態に関しては、1回の研究結果に基づくものであることや、従属変数に条件間で差が見られなかったことなどから、引き続き、検討が必要である。感謝感情と負債感情が共起している前提に立ち、両感情を喚起する手法を用いた実験の検討が今まで為されていなかったため、本研究における感情喚起状態が妥当な結果であるのか、明らかではない。今回の感情喚起の状態が正しく喚起されている状態な

のかどうか、他の感情喚起手法も用い、結果の再検討を行う必要がある。

感謝感情と負債感情の経験の違いによる第三者への向社会的行動の生起の差に関する考察

感謝感情と負債感情が、第三者への向社会的行動に及ぼす影響を検討するため、実験協力者を用いて、実際に、困っている人物とその人物による援助要請を実験参加者に提示し、向社会的行動の生起の程度を測定した。しかし、感謝感情条件と、負債感情条件、統制条件の3条件間と、性別の間で、第三者への向社会的行動の生起の程度に有意な差はみられなかった。つまり、感謝感情と負債感情の喚起は、第三者への向社会的行動に及ぼす程度に差をもたらさなかった。

この結果に至った理由は次の2点が考えられる。初めに、同調の効果が出ていた可能性が挙げられる。本研究では、1回の実験実施において、実験参加者が2人まで参加できるように実験計画をたてた。そのため、一部の実験参加者は、第三者への向社会的行動の測度である、別の研究の調査参加の程度を、一緒に実験に参加した実験参加者と同じ程度で応答する事態が生じていた。デブリーフィングの一環で、実験参加者に実験内容への気づきを尋ねた際に、実験参加者は、「別の調査への参加を本当はしないつもりであったが、(一緒に参加していた)友人が、～分に丸をつけたから、自分も同じ時間に丸をつけた」と話す場面があった。本研究の結果は、このようにコメントをした実験参加者のデータを分析から除外した結果であるが、利用したデータの中心

には、コメントを残さないだけで、一方の実験参加者と同程度の時間数という理由で調査参加を示した実験参加者がいた可能性がある。実験の手続き上、場面を思い浮かべることや、質問への回答は、実験参加者の人数の影響はないと判断したが、実際は、実験参加者同士に、同調の影響が出た可能性を指摘できる。同調の問題を改善するには、1回の実験には1人の実験参加者とすべきである。

次に、向社会的行動の測定方法にもまた、解決すべき問題があった。本研究では、「調査参加者が足りず、困っている状態の心理学を専攻する学生」を第三者として設定したが、参加者募集と縁のない分野を専攻とする実験参加者にとって、設定した「調査参加者数の不足」は、困っている状態として理解しづらいものであったと考えられる。実験参加者がイメージしやすい困っている状態の設定が、今後の研究では求められる。

引用文献

- 相川 充 (1999). 愛他的行動 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 (p.3) 有斐閣
- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, 11, 63-72.
- 渥美公秀 (2012). 被災地のリレーから広域ユイへ人間関係研究, 11, 1-12.
- 渥美公秀 (2014). 災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミクス— 弘文堂
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319-325.
- Bryant, F. B., & Veroff, J. (2007). *Savoring: A new model of positive experience*. Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associations.
- DeSteno, D., Bartlett, M. Y., Baumann, J., Williams, L. A., & Dickens, L. (2010). Gratitude as moral sentiment: Emotion-guided cooperation in economic exchange. *Emotion*, 10, 289-293.
- DeSteno, D., Li, Y., Dickens, L., & Lerner, J. S. (2014). Gratitude: A tool for reducing economic impatience. *Psychological Science*, 25, 1262-1267.
- Emmons, R. A., & McCullough, M. E. (2003). Counting blessings versus burdens: An experimental investigation of gratitude and subjective well-being in daily life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 377-389.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, 62, 187-196.
- Greenberg, M. S., & Frisch, D. M. (1972). Effect of intentionality on willingness to reciprocate a favor. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 99-111.
- 一言英文・新谷 優・松見淳子 (2008). 自己の利益と他者のコスト 感情心理学研究, 16, 3-24.
- Kabat-Zinn, J. (2009). *Full Catastrophe Living: Using the wisdom of your body and mind to face stress, pain, and illness*. New York: Random House.
- Kashdan, T. B., Mishra, A., Breen, W. E., & Froh, J. J. (2009). Gender differences in gratitude: Examining appraisals, narratives, the willingness to express emotions, and changes in Psychological needs. *Journal of personality*, 77, 691-730.
- 熊取谷哲夫 (1991). 日本語における「感謝」の談話構造と表現配列—「すみません」と「ありがとう」の場合— 広島大学日本語教育学科紀要, 1, 61-67.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011a). 感謝の構造—一生起状況と感情体験の多様性を考慮して— 感情心理学研究, 18, 111-119.
- 蔵永 瞳・樋口匡貴 (2011b). 感謝生起状況における状況評価が感謝の感情体験に及ぼす影響 感情心理学研究, 19, 19-27.
- 松浦 均 (1992). 援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 39, 23-32.
- 松浦 均 (2007). 不適切な援助を受けた場合の被援助者の感情について 人文学部研究論集, 17, 29-41.
- 三谷はるよ (2015). 一般交換としての震災ボランティア理論と方法, 30, 69-83.
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (1998). The dynamics of indirect reciprocity. *Journal of Theoretical Biology*, 194, 561-574.
- Seligman, M. E., Steen, T. A., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress: Empirical validation of interventions. *American Psychologist*, 60, 410-421.
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1990). The past explains the present: Emotional adaptations and the structure of ancestral environments. *Ethology and Sociobiology*, 11, 375-424.
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal

- altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Tsang, J. A. (2006). The effects of helper intention on gratitude and indebtedness. *Motivation and Emotion*, 30, 198-204.
- VandenBos, G. R. (Ed.). (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association. (ファンデンボス, G. R. 繁榊算男・四本裕子 (監訳) (2013). APA心理学大辞典 培風館)
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. (1978). *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.
- Watkins, P. C., Scheer, J., Ovnicek, M., & Kolts, R. D. (2006). The debt of gratitude: Dissociating gratitude and indebtedness. *Cognition and Emotion*, 20, 217-241.
- Watkins, P. C., Woodward, K., Stone, T., & Kolts, R. L. (2003). Gratitude and happiness: Development of a measure of gratitude, and relationships with subjective well-being. *Social Behavior and Personality*, 31, 431-451.
- Wood, A. M., Maltby, J., Stewart, N., Linley, P. A., & Joseph, S. (2008). A social-cognitive model of trait and state levels of gratitude. *Emotion*, 8, 281-290.
- 吉野優香・相川 充 (2017). 被援助場面における特性感謝と状態感謝に関する社会的認知モデルの検討 心理学研究 Advance online publication. doi.org/10.4992/jpsy.88.16044
(受稿10月31日：受理11月28日)